新宿海上ビル診療所 室賀 一宏　日本TCM研究所 安井 廣迪

茵蔯蒿湯

傷寒論・金匱要略

組 成	茵蔯蒿4～6, 山梔子2～3, 大黄0.8～2
主 治	湿熱黄疸
効 能	清熱利湿・退黄・瀉下

プロフィール

茵蔯蒿湯は、『傷寒論』陽明病篇と『金匱要略』黄疸病門に初出する処方で、いずれの条文も「黄疸」に対して用いると記載されている(『金匱』では「穀疸」)。おそらく急性肝炎に対して創られた処方と思われるが、日本では、黄疸を呈する病態に広く用いられたのみならず、他の方面への応用を開発して現在に至っている。なお、茵蔯蒿は、日本ではキク科のカワラヨモギの花穂を使用するが、中国では幼苗の葉(綿茵蔯)を用いる。

方　解

茵蔯蒿は苦寒により湿熱を清利し、黄疸を除く。山梔子は三焦の湿熱を清泄して下降させ、茵蔯蒿とともに湿熱を小便から排泄する。大黄は大便を通利して中焦瘀熱を下泄する。三薬が合して湿熱を二便から去り、邪に出口を与えて黄疸を除く。

四診上の特徴

矢数は、『漢方処方解説』の中で、「腹部、ことに上腹部が微満し、心下部より胸部、心臓部にかけて、苦悶や不快を訴え、胸がふさがったように感じ、口渇、便秘、腹満、小便不利、頭汗、頭眩・発黄などがある。黄疸がなくとも裏に鬱熱があれば用いてよい。脈は多くは緊であるが、ときには例外もある」と述べている[1]。

使用上の注意

山梔子を含む処方であり、長期投与の場合には腸間膜静脈硬化症に注意を要する。また、肝機能障害の報告もある[2]。

臨床応用

基本的に黄疸の処方であるが、その後の研究によって、急性肝炎のみでなく、広く肝胆の疾患(特に胆道系)に用いられるようになった。後世になって、蕁麻疹や口内炎などへの応用が開発された。

肝胆疾患

江戸時代から黄疸に用いられてきたが、症例報告は少なく、六角重任の『古方便覧』の黄疸の記載が代表的なものである[3]。近年においても、数は少ないながら、肝炎や肝障害に対する経験が報告されている[4-7]。

最近になって、胆道うっ滞を引き起こす病態に広く用いられるようになってきている。

阪上らは、重症型急性肝炎の1例および肝内胆汁うっ滞を呈した2例の患者に茵蔯蒿湯を投与し、血清ビリルビン値の速やかな改善をみたと報告している[8]。また、北原らは、標準治療で軽快をみなかった自己免疫性膵炎による閉塞性黄疸2例に茵蔯蒿湯を使用し、改善をみた症例を報告している[9]。さらに、道輪らは、高度進行胃癌術後、low dose TS-1/シスプラチン療法を施行中に高ビリルビン血症を来たした77歳の男性に茵蔯蒿湯を投与したところ、投与後よりビリルビン値が低下した症例を報告している[10]。

滝谷らは、胆汁うっ滞を来たす肝疾患に対し、ウルソデオキシコール酸と茵蔯蒿湯の併用で改善をみた4症例を報告している[11]。森田らは、原発性胆汁性肝硬変に対し、やはりウルソデオキシコール酸と茵蔯蒿湯の併用を行い、改善をみた症例を報告している[12]。

海保らは、「茵蔯蒿湯はウルソデオキシコール酸と異なり、胆汁酸非依存性の胆汁分泌を促進する。よって胆汁うっ滞を呈する病態では、ウルソデオキシコール酸との併用は合目的的である」と述べている[13]。

閉塞性黄疸で、経皮経肝胆管ドレナージ(PTCD)などの減黄処置を行った患者に茵蔯蒿湯を投与するという併用療法が行われている。岡林らは、14施設において減黄処置を行った24症例を無作為に割り付け、ドレナージ単独群13例、茵蔯蒿湯併用群11例として比較したところ、茵蔯蒿湯併用群で有意な減黄促進効果が認められ、また、食欲不振、全身倦怠感などの自覚症状改善効果も認められたと報告している[14]。佐藤らは、PTCDを施行した肝門部腫瘍による高度の閉塞性黄疸に茵蔯蒿湯を併用し、効果を認めた46歳の患者について報告している[15]。

茵蔯蒿湯は単独でも用いられるが、臨床上、他の処方と併用されることも多い。特に多いのは大柴胡湯と小柴胡湯である。岩淵は、子宮筋腫手術前後の失血性貧血に輸血施行後、発症した非A非B血清肝炎に対し、小柴胡湯と茵蔯蒿湯を併用して軽快せしめた3例を報告している[16]。中村らは、31歳の女性で先天性胆管拡張症にて肝部分切除と胆管空腸吻合手術の既往があり、29歳時より頻回に胆管炎を繰り返す患者に茵蔯蒿湯を基本処方とし大柴胡湯などで随証治療を行い、抗生剤の使用量を顕著に減量でき、妊娠出産に至った症例を報告している[17]。

胆石症の治療に漢方エキス製剤を用いた研究もある。白水らは、10施設において、胆嚢結石症例38例に対して、大柴胡湯(6例)、大柴胡湯合茵蔯蒿湯(21例)、小柴胡湯(3例)、小柴胡湯合茵蔯蒿湯(6例)、柴胡桂枝湯合茵蔯蒿湯(2例)を投与した。この中で茵蔯蒿湯の果たす役割がどの程度か判別できないが、38例のうち、症状があった25例中21例に症状の改善があり、結石は溶解したのではなく、排石されたと考えられると報告している[18]。

小児外科領域（先天性胆道閉鎖症術後）

最近、小児外科において、先天性胆道閉鎖症の術後に茵蔯蒿湯を使用した報告が増加している。小児外科漢方研究会の報告によれば、茵蔯蒿湯は術後に黄疸が遷延するか悪化する場合、肝機能（特にトランスアミナーゼ値）を下げるのに有効であると考えられ、使用時期は術後早期からビリルビン値が低下しないか、不十分な低下、再上昇の場合に使用することが多いとのことである[19]。

好沢らは、葛西手術を行った胆道閉鎖症51例に対し、茵蔯蒿湯非投与群24例、術後14日以内に投与した群20例を比較検討した結果、血清ビリルビン値は術後1ヵ月で投与群が有意に低下し、黄疸消失率も有意に高かったことから、茵蔯蒿湯術後早期投与は胆汁排泄に有効と考えられたと述べている。また自己肝生存率も投与群で高い傾向がみられたため、予後の改善に寄与する可能性があるとしている[20]。

千葉らは、胆道閉鎖症の術後黄疸持続例に対し、茵蔯蒿湯と小柴胡湯または柴苓湯を投与し、経過を観察したところ、茵蔯蒿湯と小柴胡湯投与群は、術後に黄疸が遷延したり比較的短期間黄疸が持続する例には有効であるが、1年以上遷延した黄疸には効果がみられなかったと述べ、茵蔯蒿湯と柴苓湯併用では、長期間の黄疸持続例や年数を経てから突然発黄した例に有効であると報告している[21]。

福重らは、初回手術を施行した42例のうち、茵蔯蒿湯早期投与群15例と非投与群27例に分けて経過をみたところ、総ビリルビン値の正常化は両群間で有意差はなく、術後の総ビリルビン値は投与群で早期に正常化する傾向がみられ、特に肝門部閉塞のⅢ型では有意に早く正常化がみられたと報告している[22]。

松尾らは、胆道閉鎖術後の34症例の患者（6ヵ月～21歳）に6ヵ月以上茵蔯蒿湯を投与してその予後を観察した結果、茵蔯蒿湯の使用により有意な減黄効果を認め、ウルソデオキシコール酸との併用により、血清総ビリルビン値の高値の症例でも減黄効果を認めたと報告している[23]。

皮膚疾患

皮膚科領域では、蕁麻疹を中心に皮膚掻痒症に用いる。

蕁麻疹では、戦前に堀が5例の治療経験を報告し、他院の加療で軽快しなかった例でも早期に軽快したと述べている[24]。近年は桜井が茵蔯蒿湯を中心に加療して治癒に導いた症例を報告している[25]。大場らは、維持透析患者の掻痒感に対し茵蔯蒿湯を使用し、14例の治療抵抗性の掻痒感に対し8週間投与したところ、著効3例、有効6例、やや有効3例、無効2例で、64.3%の有効率であったと報告している[26]。浮田は、妊娠23週時に発症した蕁麻疹に対し、茵蔯蒿湯を投与して治癒せしめた1例を報告している[27]。

なお、手塚は、尋常性痤瘡に桂枝茯苓丸と茵蔯蒿湯を併用して効果のあった2症例（女性）を報告している[28]。その他、Quincke浮腫に使用した報告もある[29]。

その他

別部は、アルコール性肝炎を有する初老の口内炎の男性に対して茵蔯蒿湯を投与したところ、4週間で完治した1例を報告している[30]。足立は「外出できない」84歳の女性と「だるくて夜に蕁麻疹がでる」45歳の男性に対し本方を投与したところ、外出できるようになったり、蕁麻疹が軽快すると同時に元気が出て集中できるようになった2例を報告し、原典にある「心胸不安」の応用になるのではないかと述べている[31]。また、馬場はジフテリア患者に血清療法を施行する際に茵蔯蒿湯を併用し、血清病を予防したと報告している[32]。

江戸時代の名医・中神琴渓（1744-1833）は、それまで芎帰膠艾湯などいくつかの処方で軽快しなかった女性の不正子宮出血に対して茵蔯蒿湯を用い、劇的に軽快せしめた症例を報告している[33]。

【参考文献】

1) 矢数道明: 臨床応用漢方処方解説 8-12 創元社 1982
2) 須田季晋 ほか: 茵蔯蒿湯による薬物性肝障害が疑われた1例 肝臓 52(6) 356-360 2011
3) 六角重任 ほか: 古方便覧 下冊
4) 山中寛紀 ほか: 黄疸患者に対する漢方薬茵蔯蒿湯の使用経験 漢方医学 20(1) 17-23 1996
5) 中川良隆: 外来で治癒に導いたA型急性ウイルス肝炎の1症例 医学の歩み 別冊 55-57 1998
6) 酒見亮介 ほか: 遷延した混合型薬物性肝障害に対して茵蔯蒿湯を含む多剤薬物療法が有効であった2例 肝臓 53(5) 291-297 2012
7) 河田則文 ほか: 茵蔯蒿湯によりAST/ALT値が著明に改善した脂肪肝の1症例 漢方医学 26(1) 34-36 2002
8) 阪上吉秀 ほか: 重症型急性肝炎および肝内胆汁うっ滞に対する茵蔯蒿湯投与効果に関する臨床的研究 和漢医薬学会誌 4(2) 124-129 1987
9) 北原英幸 ほか: 自己免疫性膵炎による閉塞性黄疸に茵蔯蒿湯を使用した2症例 日東医誌65(3) 202-209 2014
10) 道輪良男 ほか: 癌術後化学療法に漢方製剤を併用し有用であった2例 Prog. Med. 22(5) 1348-1349 2002
11) 滝谷 敏 ほか: 胆汁うっ滞をきたす肝疾患に対するウルソデオキシコール酸と茵蔯蒿湯併用の試み 新薬と臨牀 45(1) 192-197 1996
12) 森田 翼 ほか: 原発性胆汁性肝硬変に対するウルソデオキシコール酸と茵蔯蒿湯の併用療法の有用性 医学のあゆみ 174-176 1998
13) 海保 隆 ほか: 周術期管理・合併症と漢方 黄疸・肝障害－茵蔯蒿湯 臨床外科 68(12) 1308-1313 2013
14) 岡林孝弘 ほか: 閉塞性黄疸減黄処置後減黄率に及ぼす漢方製剤茵蔯蒿湯の効果 日臨外会誌 59(10) 2495-2500 1998
15) 佐藤久芳 ほか: 閉塞性黄疸においてPTCDと併用した茵蔯蒿湯が奏効した1例 漢方診療 5(4) 33-35 1986
16) 岩淵慎助: 輸血後肝炎の漢方治験 日東医誌 36(1) 61-66 1985
17) 中村佳子 ほか: 再燃性胆管炎に漢方治療が奏効した1例 日東医誌 62(5) 669-674 2011
18) 白水倶弘 ほか: 漢方エキス製剤の胆石症治療効果についての臨床的評価 臨牀と研究 70(8) 2643-2645 1993
19) 小児外科漢方研究会 胆道閉鎖症に対する漢方方剤使用に関してのアンケート調査結果 日小外会誌 39(2) 228-230 2003
20) 好沢 克 ほか: 胆道閉鎖症における茵蔯蒿湯術後早期投与の有用性に関する検討 日外科系連会誌 37(4) 724-729 2012
21) 千葉庸夫 ほか: 胆道閉鎖症における漢方方剤の使用経験 漢方と最新治療 2(4) 403-408 1993
22) 福重隆彦 ほか: 胆道閉鎖症術後における茵蔯蒿湯の使用経験 Prog. Med. 19(4) 1048-1050 1999
23) 松尾洋一 ほか: 胆道閉鎖症術後における茵蔯蒿湯の使用経験 Prog. Med. 17(9) 2541-2542 1997
24) 堀 均: 茵蔯蒿湯と蕁麻疹 漢方と漢薬 8(1) 64-66 1941
25) 桜井みち代: 漢方治療が奏効した蕁麻疹の4症例 東静漢方研究室 33(1, 2) 77-81 2010
26) 大場正二 ほか: 血液透析患者の皮膚掻痒症に対する茵蔯蒿湯の効果について 日東医誌 45(5) 192 1995
27) 浮田徹也: 妊娠時における蕁麻疹の漢方治療I 漢方診療 7(6) 53-55 1988
28) 手塚匡哉: 気滞血瘀と弁証された尋常性痤瘡に対する桂枝茯苓丸の使用経験（第3報） 新薬と臨床 55(3) 538-545 2006
29) 松崎 茂: Quincke浮腫: 星状神経節ブロックと茵蔯蒿湯が有効であった1例 漢方診療 12(12) 4 1993
30) 別部智司: 急性症状の経過をたどる口内炎には「茵蔯蒿湯」 歯界展望 122(1) 178-179 2013
31) 足立秀樹: 茵蔯蒿湯の使用経験 漢方の臨床 44(12) 1522-1527 1997
32) 馬場辰二: 茵蔯蒿湯で血清病を防止した話 漢方の臨床 2(3) 184-185 1955
33) 中神琴渓: 生々堂医譚